第89回独立展地方巡回展（予定）

■京都展
京都市京セラ美術館
2023年1月24日（火）ー29日（日）

■名古屋展
愛知県立総合文化センター
2023年2月8日（水）ー12日（日）

■福岡展
福岡市美術館
2023年4月4日（火）ー9日（日）

第90回独立展 予告！

2023年10月18日（水）ー30日（月）
国立新美術館
搬入日／10月5日・6日

独立春季新人選抜展 予告！

2023年3月25日（土）ー31日（金）
東京都美術館

詳しくは独立展ホームページまで！ ▶http://www.dokuritsuten.com

独立ノート第11号

発行日／2022年10月1日
発行者／独立美術協会

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-13-8-507
Tel.03-3490-5881　Fax.03-6420-0026
E-mail.dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp
URL.http://www.dokuritsuten.com

印刷／エーワンネットワーク・デザイン／八武崎勢津美

ー編集後記ー

コロナ禍 3 年目となる with コロナの時代が続きます。加えて、突然のウクライナ侵攻により世界情勢も変化して参りました。ジョン・レノンの「イマジン」が、いまだ現実のものとして歌われるように、平和への祈りが続いています。理不尽さの狭間でも、光を見出せるような世界を求め、私達の創造の神々へと想いを託して行きたいものです。

ANNUAL DOKURITSU note 2022

独立ノート 11

■独立レジェンド／須田国太郎　■キーパーソン／桜井寛が語る　■アトリエ探偵団／森田康雄

独立美術協会小史

【誕生ー初期】(1930ー1959) 1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巍(37歳)、鈴木亜夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高畠達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。
初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えられる。第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立展」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960ー1984) 現代の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985ー) 独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。
一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化して行った。
独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。
批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。

独立ノート第11号　発刊にあたり

独立展に集う画友の皆様、コロナ禍の続くなか如何お過ごしですか。この二・三年、欧州での戦争など、気の滅入ることが多い中、日々制作に打ち込まれていることと思います。
さて、独立美術協会も諸先輩のご努力のおかげで、来年九十周年を迎えます。この間も大戦争や大地震など大変なことが多々有りましたが、絵を描くという情熱が絶えたことはありません。絵を描くということは何と素晴らしい事なのでしょう。絵は描く人の心の中が鏡のように画面に表れてきます。秋の本展で皆様の心の絵とお会い出来ることを楽しみにしています。

事務所委員　絹谷幸二

目次

- 独立美術協会小史 ―― 表紙裏
- 独立ノート第11号発刊にあたり ―― 1
- 独立レジェンド／須田国太郎 ―― 2
- 独立キーパーソン／桜井寛 ―― 4
- アトリエ探偵団／森田康雄 ―― 6
- 独立ホットニュース ―― 8
- 特集！独立賞のころ ―― 10
- つぶやき生の声！ ―― 12
- 独立人ーひとりたつひとー／大塚利典 ―― 13
- 第89回独立展地方巡回展予定 ―― 裏表紙
  第90回独立展予告

制作：独立ノート編集室
阿部栄一　井上達也　加藤啓治　島崎陽子　高橋雅史
津川めぐ美　鳥羽祐二　松原潤　輪島進一
協力：画像提供／瀬島匠　千葉光　資料協力／結城康太朗
表紙：須田国太郎「犬」90.5×73.0cm 1950年 東京国立近代美術館収蔵
Photo:MOMAT/DNPartcom

学術研究から独自の画境へ

須田国太郎 すだ くにたろう Kunitaro SUDA

西洋写実主義と東洋的精神の融合を求め、独自の明暗法による世界観を開拓。誠実で寛大な教育者でもあった。

「須田国太郎展」図録2005年 p173
京都国立近代美術館 Photo:田中真知郎

1891年(明治24)京都に生まれる。生家の周辺には日本画家が居住する環境だったが、中学生のころ京都に丸善が開店し、ゴッホを含む後期印象派展での最新の衝撃的な出会いが洋画への開眼だったとも云われている。

高等学校の頃から独学で油彩画を描き始め、京都帝国大学に入学。大学では美学・美術史を専攻。大学院へ進学してからは、西洋写実主義を学問として探求するだけでなく、知と技の総合的な独自の解答を示そうと、関西美術院で本格的にデッサンの研究を始める。

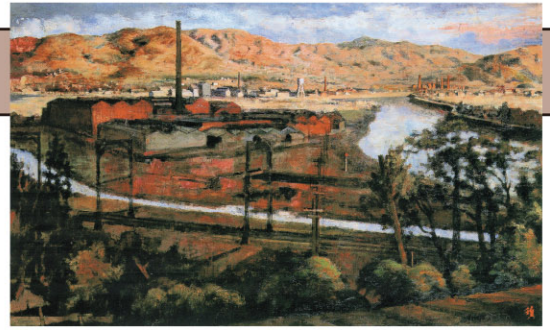
その後、1919年(大正18)第1次世界大戦終了後の欧州へ留学。注目すべきは、当時の多くの日本人留学生が、パリで新しい絵画表現を学ぶ傾向にあったのに対し、須田は、西洋絵画の本質、西洋の写実精神の探求を目的に、スペイン・マドリードに留学。留学中はプラド美術館でヴェネツィア派やバロック絵画の模写を行い、色彩理論と明暗法など、西洋絵画の理論と技法の研鑽に励んだ。またヨーロッパ各地にも出かけ、セザンヌ等同時代の芸術の摂取にも意欲的に取組んだ。

帰国後、41歳となる1932年(昭和7)初の個展を銀座の資生堂で開催。翌年、独立美術京都研究所開設と共に指導者として招かれ、1934年(昭和9)里見勝蔵の推薦で独立美術協会会員となる。この頃より会員としての制作活動も本格化し、独自の重厚な作風を確立する。観る側の想像をかき立てる独特な絵肌は、黒を基調とした表現に、削る、擦るなどの行為が加わり、かすれた線や点となって、明るさが増し、画面を息づかせる。そうした彼の探求心とたゆまぬ努力により生まれたのが、代表作「犬」である。

制作内容が深化していく一方で、戦後すぐ芸術院会員に推挙。多くの大学で教鞭を執り、数々の展覧会の審査員、さらにヴェネツアビエンナーレの日本代表、京都市芸大学長代理等として存在を増し、絵画に関する著作も多い。当然制作時間は減っていくが、その合間に写生の旅も続けている。無念にも1957年から療養生活の後、1961年(昭和36)逝去、70歳であった。

「自画像」38.0×45.5cm 1914年 京都市美術館収蔵

「アーヴィラ」53.0×65.0cm 1920年 京都国立近代美術館収蔵
Photo: The National Museum of Modern Art, Kyoto



「工場地帯」130.5×212.2cm 1936年 兵庫県立美術館収蔵

「校倉(乙)」92.0×118.0cm 1943年 京都国立近代美術館収蔵
Photo: The National Museum of Modern Art, Kyoto

須田国太郎の言葉 ―故芝田耕会員のメモより

- ○絵は単に頭脳明晰だけでは描くことはできません。
- ○描く時、絵の要素となる部分であってもこれを無視する位の大胆さが必要です。
- ○大きいものは、少し小さめに描けばかえって大きく見えるものです。
- ○ものを見ないでも描けますが、ものを見る方がよろしい。
- ○作画の進行は、自然に無理でなく、なるようになって出来てくるものです。
- ○影の部分の色調は、影の中にある。美しい色を見つけなさい。

師から学んだこと

独立美術協会会員 伊藤弘之

高校生の頃、自分の進路を決めた一枚の絵と出会った。独立展に出品された須田国太郎先生の「窪八幡」がそれだ。

現役入試に失敗し、大阪市立美術館の研究所へ通うことになる。入所挨拶のため館長室へ、館長代理で来られていた先生との初めての出会いがあった。翌年美大での入試面接で"画家の道は厳しいですよ"どうしますか？との質問があり、「必ずパレットが乾かないように努力します」とお約束した。

絵画の内面から伝わる内容こそが絵画の命であること。真実を見極め、そのリアルの造形化と構成を学んだ。鷲や動物たちのリアルさ、山間風景ではセザンヌのサンビクトワールの分析から光と影で東洋的構成を知ることが出来る。先生は卒業を待たず他界されたが、独立展を研鑽の場と考え、85歳になる今も私は在る。

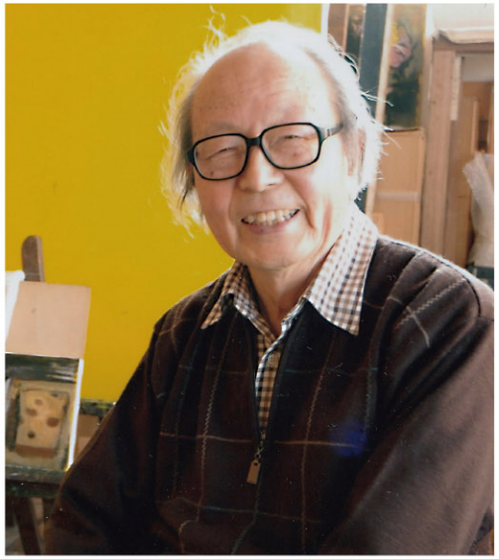
●三之瀬御本陣芸術文化館

須田国太郎常設展示館として平成16年に開館。須田を中心に日本近現代の作品を紹介。歴史的街並み保存のため、本陣の外観を再現した美術館で、須田の作品約90点を収蔵している。

〒737-0301 広島県呉市下蒲刈町三之瀬311
TEL 0823-70-8088
URL http://www.shimokamagari.jp/facility/gohonjin.html

桜井寛が語る

Hiroshi SAKURAI



三鷹市の閑静な住宅街にある先生のご自宅。画室にて制作中である十果会出品予定の作品を前に懐かしいお話を伺うことができました。

1931	長野県南佐久郡に生まれる
1955	東京教育大学(現:筑波大学)教育学部芸術学科卒業
1963	第31回独立展／独立賞（'66）
1967	第35回独立展／独立美術協会会員推挙
1971	第14回安井賞展('72 '73 '74 '80)
1975～76	スペインを中心に渡欧
1979	十果会結成（以後毎年）
1994	特別展 桜井寛展／青梅市立美術館
1995	桜井寛の世界展／池田20世紀美術館
2001	武蔵野美術大学教授退任展／武蔵野美術大学資料図書館
2011	特別企画展 桜井寛展・モチーフと共に／佐久市立近代美術館
現在	独立美術協会会員

佐久ルネサンス

少年時代の楽しい記憶は何もなくなってしまうほどに、戦争の傷は大き過ぎて辛い時代でした。太平洋戦争は私が10歳から14歳の時期に重なります。しかし戦争末期、故郷の佐久には加藤陽、奥村土牛、野口弥太郎、有島生馬、その他錚々たる顔ぶれの多くの有名画家が疎開したのは画期的なことでした。加藤陽先生が中間冊夫先生を招いて講習会を開催するなど、当時の様々な活気ある美術活動から佐久のルネサンスと呼ばれるような状況が生まれました。戦中、戦後の苦しい中にあってもこのような幸運に恵まれたこと、あの青春の強烈な矢のように過ぎて行った一時が私の心の支えであり、貴重な先生方との出会いによって画家になる決意を固めることが出来たのではと思っています。その頃の松樹路人先生との思い出は、中間先生の名刺を持って自由が丘の自宅を訪ねた日のことです。個展の直前にも拘わらずおもてなしをしていただき、猛暑の日に熱いうどんを食べました。身体にとても良いということでした。独立展への出品は1951年、20歳からです。大きな包みを抱えて電車で上野まで搬入したのは遠い記憶です。

スペイン グラナダ

1975年から1976年末まで、スペインを中心にウィーンやドイツに滞在しました。坂崎乙郎先生から粗野でよいから荒々しくても課題を追究できる町としてスペインのグラナダを勧められました。グラナダ郊外を歩き、スペインでの生活の中で探し求めた「人々が去った廃墟としての村」人間の生活の痕跡とスペインの光と影、そのイメージを拡大するに至った画面構成の追求は今日までシリーズとして続いています。また1987年から1988年にかけての3か月間だけですが、アメリカのニューヨークへも取材しました。ハドソン川から見たシルエットの自由の女神を描きました。それぞれの国や地方の現実から受けた空気感を制作に活かすように心掛けています。

「走る牛」100F 1963年 初の独立賞

絵のモチーフたち

身の回りにある、できれば日常にある物をモチーフにしています。骸骨や魚の頭などは日常性とは異なりますが、象徴としての死、或いは生への痕跡を感じ好んで描きました。しかし、常に其処に存在している現実感、生の存在感を感じさせるものに強く惹かれます。浴槽やベッド、鞄、廃墟、目玉焼きとフライパン、自画像や裸婦などを繰り返し描いてきました。モチーフとの対話を通して内面世界を模索し深めることで、作品の充実感が増します。浴槽はスペインで見たもの、鞄は弟から譲り受けたものでとても感謝しています。ベッドは自分で所有するものです。懐かしい思い出や辛く苦しい時に自分とともに常に傍らにあったもの達です。限られたモチーフではありますが、実物に対して常に新鮮な感性を保つこと、主観的にとらえることができるものとして、私の絵のモチーフとなっています。

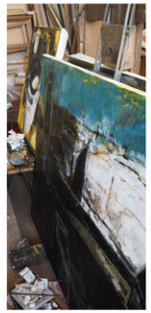
「静物・二つのフライパン」50F 2001年

「捨てた村」150F 2014年

アトリエ外観

武蔵野美術大学教授の頃

「ペンキ職人（ニューヨークにて）」1987年



制作中の作品

フォーヴィズム・独立

若い頃からフォーヴィズムの持っている力や熱気に共感してきました。中間先生からの影響が大きいと思いますが、制作は描いては壊し、壊しては構成する、その反復と格闘の過程で絵に時間の堆積や表現の深さが付与されるのを覚えます。独りよがりで描くのではなく、大きなバックボーンによって絵が構成されている魅力ある絵に惹かれます。
私も独立とほぼ同年齢になりましたが、独立に対して期待したいことは時代が過ぎてもフォーヴの勢いや凄さを忘れないで受け継いでいってほしいことです。また独立出品者の制作への情熱には大いに期待をしています。私のこれからの制作については、単なる興味やそういったものを完全に除外した対象に対する独自の世界観を正面に据えて描いていきたいと考えています。

「シュミーズの女」150F 2012年

アトリエ探偵団 atelier - TANTEIDAN

森田康雄 もりたやすお Yasuo MORITA

1946 京都市に生まれる
1972 武蔵野美術大学卒業
1981 第5回目伯現代美術展最優秀賞
1983 第25回安井賞展(26.32.33.35.39回)
1986 第54回独立展/独立賞(55回同賞.56回会員推挙)
1990 第1回両洋の眼・現代の絵画展((2.8.9.10回)
1991 武蔵野美術大学より海外研修派遣員として渡仏
2005 森田康雄の世界展/奈義町現代美術館
2017 森田康雄―その軌跡展/城陽市歴史民族資料館

昼のアトリエ。制作中の森田康雄会員

Photo by KIRICO

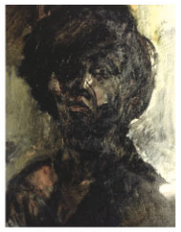
「五女の水玉は飛んだ」F150
1981年 中山賞 第25回安井賞展

「パーティーに行こうぜ！」F130
1986年 独立賞 京都市美術館収蔵

「モンローそして、ディーン…。」F200
1989年 第33回安井賞展

「Citéのアトリエ」F200
1991年 第35回安井賞展

「アトリエ日記ー凝視」F150
2016年 京都市美術館収蔵


22歳の自画像(1969年)

京都市郊外の穏やかな気候の地、今回はそんな環境にお住まいの森田康雄会員のアトリエに探偵団が訪問させて頂いた。森田会員にとってのアトリエは、絵画を制作する以上に心の安らぎを得るために、お気に入りの物たちに囲まれて静かに過ごす大切な場所ということだ。レトロでポップである作品から白を基調にした静謐な画面に変化しても、自画像を中心とした家族画にこそ普遍性を感じ取ってもらえるのではと、微笑んで話すアトリエには自作品はほとんど飾られていない。あくまでもお気に入りの物や作品に囲まれ、夜の柔らかな灯りの中で身体を休める時こそが、構想を練るための大事な時間なのだろうか。

写真注釈 ①フランスで買ったアンティークのビスクドール ②須田国太郎の素描 ③アンティークのイギリス製水彩絵具箱 ④作業台・机 ⑤お気に入りのステンドグラスをはめ込む ⑥作品にも登場するマドモワゼルの帽子 ⑦きっちりと整理された絵の具類 ⑧完成品や作りかけの塑像 ⑨高さ5mの窓 ⑩リラックスする森田会員 ⑪大きな金木犀が見える中庭 ⑫鳥籠と人形のオブジェ ⑬里見勝蔵のデッサン

大学卒業式が学生運動のために中止。アトリエの前で卒業証書だけ手に記念写真(1972年)

アトリエの小物

アトリエ外観

絹谷幸二先生 文化勲章受章

皇居にて（右から2番目絹谷幸二先生）

絹谷幸二先生が2021年度の文化勲章を受章されました。独立美術協会としては、故林武先生（1967年）、奥谷博先生（2017年）に続く素晴らしい快挙です。

「天空・仁王・喝（左）」194×162cm 2021年

絹谷会員は奈良に生まれ、長い歴史の息づく街で育ちました。東京藝術大学で油画を学び、イタリア留学ではアフレスコ画の研究・技法を深めました。エネルギーあふれる画面には壮大な世界が広がります。

―こしかたの記・菩提心― 展は、一年にわたり東京・高松・福岡を巡回し、大阪/絹谷幸二天空美術館では、文化勲章受章・開館5周年記念特別展「アフレスコ」が開催されました。若手芸術家の育成・後進の指導などにも、幅広い活動に力を注いでおられます。

第1回 絹谷幸二 天空美術館 キッズ絵画コンクール 優秀作品展

会期：2022年4月29日−6月27日
会場：絹谷幸二 天空美術館（梅田スカイビル タワーウエスト27F）
テーマ：「あなたの大切な人たち、自然、まち並み」
応募資格：小学生〜中学生以下（一人につき一点まで）

国内・海外から、たくさんの力作が届き、応募者数3009点の中から40点の優秀作品が選出され、27点が受賞しました。次世代を担う子どもたちの無限の可能性に期待し、大いなる未来に心より拍手を送りたいと思います。

「自然にやさしい風力発電」
第1回 絹谷幸二キッズ賞グランプリ
舛井勝秋さん（山口県小学4年生）

第2回キッズ絵画コンクール（2023年度）開催予定

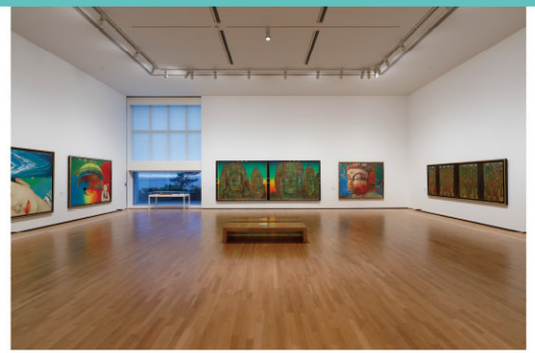
●開催募集要項公開 → 2022年9月
●作品応募受付 → 2022年12月−2023年1月末日

【主催・お問い合わせ先】
絹谷幸二 天空美術館「キッズ絵画コンクール」事務局
TEL:06-6440-3760／FAX:06-6440-3762
E-mail:k-tenku@sekisuihouse.co.jp

奥谷博 ― 無窮へ

HIROSHI OKUTANI:Towards Infinity

会場：神奈川県立近代美術館 葉山
会期：2022年2月12日－4月3日



Photo：木奥恵三

「底力」181.0×227.3cm 2021年

「無窮へ」のタイトルに誘われ、奥谷会員の極まりなきご境地、座右の銘とされる「藝術無終―永遠に未完」を、まさに目の当たりに体感できる大規模展覧会でした。（故郷の高知県立美術館から作品6点追加し巡回）

今回初めて公開された「宿毛時代」の多数の水彩画からは、当時の面影を宿す生家や周辺の風景等を興味深く拝見いたしました。メインの作品群は、学生時代の厚塗りから、自画像・静物・世界遺産・家族・仏像と多岐のテーマにわたり、その絵画世界は「奥谷芸術」として幅広い支持を集め、揺るぎない求心力で独立展を牽引戴いております。

（2022.2.27 取材）

桜井浜江記念市民ギャラリー 開設 2022年4月

東京都三鷹市下連雀3丁目42番3号1階

故桜井浜江会員は1908年山形県に生まれ、女流画家の先駆者としてまた1954年からは独立美術協会会員として幅広く活躍されました。1939年から2007年98歳で亡くなるまでアトリエ兼住居を構えた跡地に、桜井会員の画業を顕彰し、また三鷹市民の美術作品等の発表の場として本年・2022年4月に三鷹市桜井浜江記念市民ギャラリーが開設されました。

「富嶽」絶筆 F200 2007年

［お問い合わせ先］ 東京都三鷹市公会堂
〒181-8555東京都三鷹市野崎1-1-1 Tel.0422-29-9868

独立展を担う中堅会員に、独立賞の思い出を語っていただきました。

ー トラウマ ー

井澤 幸三

「IMITATION-a」1994年

● 略歴 ●
1980 京都市立芸術大学美術専攻科修了
1977 第45回独立展初入選
1981 東京セントラル美術館油絵大賞展/佳作賞受賞
1984 第1回日本青年画家展出品('85'86'87'88)
第5回日本青年画家展/優秀賞受賞
1985 安井賞展入選('88'93'95)
1990 両洋の眼・現代の絵画展出品
('91'92'93'95'96'05'07'08'09)
1994 第62回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推挙)
現在 大手前大学教授

学生のころ、合評会で恩師にこう批評されたことがあります。「井澤君。君の絵ね。下塗りの時のまだ配色していないモノクロームが良かったなあ。」愕然としました。
それから数年して、私の個展会場である写真家の方がおっしゃるのには。「一般論だけどね井澤さん。画家の人って構図を軽く考えてないかな。写真家にとっては構図が全てなんだけどね。」一般論といいながら彼の眼は私をじっと見つめてこられるのです。
色彩と構図構成についての欠陥に関しての二つの思い出は、独立展で修練を重ねても払拭できるものではなく、独立賞を受賞したころも現在に至るまで、ずっと私のトラウマとして残り、制作の拠り所となっています。絵って難しいなあ。

ー 怖い守りの姿勢 ー

金井 訓志

「ケルビムと二人の男(昼)」1990年

● 略歴 ●
1951 群馬県生まれ
1970 ～太平洋美術学校で学ぶ
1980 ～独立展/'90'91独立賞受賞、'92第60回記念賞受賞、会員推挙
1991 第34回安井賞展(以後'97迄、セゾン美術館他)
1995 平成６年度文化庁買上優秀美術作品に選出
2000 第22回日本秀作美術展(日本橋髙島屋他／以後'01)
2002 文化庁派遣芸術家在外研修員としてイタリアに留学
2007 文化庁在外研修員制度40周年記念展(国立新美術館／以後'17)
2012 公募団体ベストセレクション2012(東京都美術館)

長年裸婦ばかり描いていたが、そろそろ自分の作品を発表したいと思い独立展に決める。独立に決めたのは、きら星のように輝く作家たちの中で、ついでに拙作も観て貰えると思ったからだ。とにかく観て貰いたいだけで賞など全く期待しなかった。自分の挑戦を観て貰えば良いという姿勢だった。
無欲が良かったのか7年目に初受賞、数年後には独立賞をいただいた。しかし受賞で欲が出てきた。来年も受賞したいと。質を落とさず今を続ける守りの姿勢になってしまった。そんな姿勢が現れた勢いの無い作品に評価は無かった。賞は有り難いが、芸術を志す人生ではほんの小さなご褒美に過ぎないのだ。
やはり挑戦する心意気が大切！今も毎年自分に言い聞かせる。

ー「独立賞のころ」ー

廣田 政生

「標柱」1998年

● 略歴 ●
1955 滋賀県生まれ
1980 京都市立芸術大学美術専攻科西洋画専攻修了
1990 第58回独立展／奨励賞受賞
1998 第66回独立展／独立賞受賞（翌年、会員推挙）
1999 第33回文化庁現代美術選抜展
2014 ～独立会員によるグループ展「七人力」出品

独立賞を取りたいという一念からか、あの頃はよく頑張って、その結果作品が急激に増えだして、そこそこの大きさのアトリエも、いよいよ足の踏み場もなくなってしまった。床に作品パネルを置いての作業が常であるから、床面が確保できないと絵が描けない。
そこで考えた。作品パネルを半分に切れば、作業スペースは倍になる。リクツの上では3つに切れば３倍のスペースが稼げる。そこで縦やら横やら斜めに切り離して作品を創ることにした。組み合わせを変えると新たな見え方の作品が生まれて、俄然制作が楽しくなった。
今のアトリエは多少の余裕はあるものの、やがて足の踏み場もなくなるだろう。またまた俄然制作が楽しくなるに違いない。

ー 終わりのない問いかけ ー

福満 正志郎

「Energy of Eros」1999年

● 略歴 ●
1961 鹿児島県生まれ
1985 筑波大学大学院修士課程芸術研究科修了
1995 第50回南日本美術展/第50回記念大賞受賞
1996 第39回安井賞展/入選
1998 個展「Seven Years in Chiba 1992～1998」(佐倉市立美術館)
1999 第67回独立展/独立賞受賞(翌年、会員推挙)
2002 個展「ENERGY」(茨城県つくば美術館)
2005 第4回現代茨城作家美術展(茨城県近代美術館/～'21)

ゴーギャンの「我々はどこから来たのか、我々は何者なのか、我々はどこに行くのか」は、古い画集で観た少年の私に絵画表現の奥深さを刻印してくれた。そして夢中で絵を描いていた少年は、はたと立ち止まる。果たして絵を描くことに意味があるのだろうかと。
青年となり独立展に出し始めると、そのような問いかけが無効になるような、自身の作品の貧弱さを目の当たりする年月となった。そのような中、独立賞を授かった頃は、まさに自分の「生」と「絵画」がギリギリのところでせめぎ合い燃焼していたのではないかと振りかえる。
絵を描く行為は子供の泥んこ遊びのようなものかもしれないが、今も終わりのない問いかけが、制作の原動力となっている。

つぶやき生の声

TSUBUYAKI_NAMANOKOE

不安の多い世の中にあっても、私たちの「描きたい」思いはますます強くなります。
制作に向かわせるパワーは、どこから生まれているのでしょうか。
準会員、会友の方々に胸の内をつぶやいて頂きました。

昔、母からの仕送りで研究所に通うことが出来た。
今、絵筆を握る時亡き母への感謝の想いが絵の具の中に溶けてゆく…。 ー 池田宣弘 北海道 ー

銀座で三人展を行った時、多くの先生方が足を運んで下さいました。
独立だけですよ、と画廊の方。有り難いです。 ー 町田美野 宮城 ー

世の中の流れがあっという間に変化し続ける日常で、ささやかな喜びと苦しみの中でもがいております。 ー 加藤あ貴 東京 ー

独立展に出品し、40数年。 常に自分との戦い、なかなか戦果が得られず。
でも今日も絵筆を握っている。 ー 秋富浩藏 愛知 ー

公立の小学校に画家の先生がいて、私の絵をバケツで洗いなさいと。
それが、私の原点だったと思います。 ー 吉見恵美子 三重 ー

大丈夫、大丈夫！心でつぶやいています。
いろいろな事に直面し、こわれそうな自分を励まして、大丈夫！大丈夫！！ ー 山本弘子 大阪 ー

44年前のインドで…手相見のおっさん曰く。「アナタハ抽象画デ有名ニナル」。
その占い、まだ当たらへんけど！ ー 楠瀬伸和 和歌山 ー

生きていく中で、数度の試練を与えられたが、描くことをやめられない私がいる。 ー ふじいあさ 徳島 ー

家の庭に虫たちが棲み、春になると頻繁に姿を見せる。私の中にも一匹虫を飼っている。
「絵の虫だ」ムズムズと動きが止まらない。この虫と共生し続ける決意である。 ー 三島忍 広島 ー

海外の歴史ドラマが面白い。命や権力を守ろうと繰り返し知謀をめぐらす。
画布に向かう私はこの粘りに欠ける。 ー 藤原房子 島根 ー

私の住む福岡は日本列島西方地。コロナ禍中、東京は遠い。
幾月重ね、この画風で良いのかと自問自答する日々。 ー 中村かよこ 福岡 ー

コロナ禍により人と会うこともままならぬ中、友が3人亡くなりました。
まだ描ける私は描きたいのを描くコツコツと…。 ー 牟田常文 佐賀 ー

まっさらのキャンヴァスに立ち向かう時のワクワク感。
それがある限り、私は創造者であることを許されると感じる。 ー 吉村英彦 鹿児島 ー

HITORITATSUHITO
独立人 ーひとりたつひとー

大塚 利典

おおつか りてん
Ritten OHTSUKA

左「こもれび」 中「ランプ」 右「風車」

1 ステンドグラスと私

大学でステンドグラスの講義を受けたのがきっかけで、光を通して見るガラスの色の美しさに魅了されました。さらに大竹ステンドグラスという老舗の工房で2年間程アルバイトに従事し、そのあとは独学で古典的なステンドグラスの製法技術を身に付けました。ステンドグラスは技法的にも完成の域にありますが、一方でその絵柄の部分では時代と共に変化発展しています。私の場合は絵画制作とステンドグラス制作は車の両輪に似てどちらが欠けてもバランスが悪くなります。私の中でのステンドグラスの位置付けは「色ガラスを絵の具とした絵画」といった側面が強いです。但し透過光で見るステンドグラスには絵の具では表現不可能な世界があります。絵の具の色彩と透過光による色彩が、私の中では矛盾無く同居しているようです。ステンドグラスは非常に手間暇が掛かり、また材料のガラスはほぼ輸入品を使用するので、制作費も高額になりますが、全く宣伝していないにも関わらず口コミで制作依頼があり、細々と今日まで続いています。注文の殆どは個人宅です。

「飛翔の刻ー化身」F130
2008年／会員推挙

2 絵画作品について

学生時代に壁画技法、特にフレスコ画とステンドグラスに魅了されました。ステンドグラスについては既に縷々述べたとおりですが、一方のフレスコ画技法の可能性と奥行きの深さには、他の技法材料にない手応えがあり、夢中で取り組みました。それから現在に至るまでに紆余曲折あり、フレスコ技法から離れ独立出品作品ではアクリルを中心に混合技法で制作しています。とは言えフレスコ画(技法)の魅力は今も自分の中で息づいていると思います。200号作品で裸婦群像をテーマに展開してきたのも、ルネサンス期の巨匠のフレスコ画に大いに影響を受けているのは確かで、いやもう一歩踏み込んで、現代に往年の群像の魅力を復活させたいという思いもあるかも知れません。困難で且つ魅力的なテーマではあります。

「天地平衡」900mm×740mm

「ローマの松 ーイタリア・カラカラ遺跡」水彩 F30

1948年 埼玉県に生まれる
1974年 東京芸術大学大学院壁画科修了・大橋賞
2007年 第75回独立展独立賞(翌年会員推挙)
北関東美術展,東京セントラル美術館油絵大賞展,東京国際美術展
上野の森美術館絵画大賞展,現代日本美術展,浅井忠記念賞展
個展、壁画、フレスコ壁画制作、ステンドグラス制作多数
独立美術協会会員,日本美術家連盟会員,埼玉県美術家協会会員